



BRIDGEの取組が、時事通信社「教育奨励賞」推薦校の実践として『内外教育』（第7213号）に掲載されました。

2年生_SDG s 探究成果発表会にむけて

3月13日（木）の学年全体の発表会本番に向けて、各自が設定した課題を再検討し、解決策を模索しています。中間報告会で外部の講師の方や、いつもと違うメンバーとの意見交換で、ヒントが見つかった生徒もいれば、もう一度課題の設定をやり直したいな・・・間に合うかな・・・と試行錯誤を続いている生徒もいます。最後の発表会までに理想的な発表資料を作成し、プレゼンをかっこよくすることが目的ではなく、このような生徒自身の気づきや振り返りと改善こそが探究の授業で育みたい力だと考えます。

中間報告会の後は、個々の活動に入りましたが、定期的にグループ活動を取り入れています。自分の発表内容を共有し、アドバイスを送り合うことで、自分一人で考えていても思いつかないようなアイデアをたくさんもらうことができた生徒は、一人で黙々と作業をしている時間より、活き活きとした表情が見られました。「良い点GOOD」「悪い点BAD」という切り口ではなく、「良い点GOOD」「もっと改善したい点MORE」という切り口でポジティブな意見交換をすることができました。本戦で発表する代表者選びは、激戦となりそうです。



「キャリア教育がわかる：実践をデザインするための<基礎・基本>」

・日時：12月25日（火）・講師：児美川孝一郎先生（法政大キャリアデザイン学部）

キャリア教育推進研修会に参加し「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業設計について、ディスカッションを通じて理解を深めることができました。生徒がグループワークで多様な意見を出し合い、合意形成を図りながら学びを深めていく過程を、教員自身が実際に体験することで、その意義を改めて実感しました。一方で、どのような場面でどのようなテーマを設定すれば、生徒が主体的に考え、共有することで「深い学び」につながるのか、教員が、問い合わせる必要性を感じました。改めて、正解がないテーマに取り組むことの難しさを実感するとともに、課題意識も新たにしました。

キャリア教育というと、「将来の夢を見つけ、それを動機に進路を選択する」といったイメージを持つ方が多いかもしれません。しかし、児美川先生のキャリア教育の考え方には、「やりたいことはなくてもいい」という視点があります。実際、私たち自身も高校生の頃に「やりたいこと」が明確にあったわけではありません。それでも、現代の子どもたちは小学校や中学校の段階から「夢は何？」と問われ続け、高校生になると進路選択と直結する質問が投げかけられます。「夢」や「やりたいこと」があることはエネルギーになりますが、それがないことをネガティブに捉える必要はない、というのが児美川先生の主張です。「キャリアを職業で答える必要はない」という考え方も非常に印象的でした。「楽をしたい」「お金持ちになりたい」「誰かにありがとうと言わせたい」といった動機でも十分であり、それが「やりたいこと」を考える出発点になるという視点は、私にとっても新鮮で、改めて共感を覚えました。

